



2013年 1月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 51

紅線編「滑稽俳句集」を読み解く 43 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 俳句があればなんもいらぬお正月 八木健

街にジングルベルが流れ、京の南座には顔見世のまねきがあがり、大阪の国立文楽劇場では、通し狂言「仮名手本忠臣蔵」の公演。今年も恒例の年末行事が始まりました。幼い頃は一日が長く感じられたものですが、最近是一年さえもが短く、もうすぐまたお正月です。ところで、会長は本稿に掲出させて戴いた御句のお気持ち、今もお変わりになっていませんか？

会長 > 自作が満足ゆくものならば、銭・金には代えられない喜びです。最近正月に限らず、良い句が出来れば、年中、何にもいらぬ正月気分です。

高橋 > 成る程！お気持はお変わりない。いや、それ以上なのです。私など小人は、まだまだ世俗的欲求が多くて…。(笑)それでは、本日は紅線編「滑稽俳句集」の「冬人事」の部、季語は「蒲團」の句のご解説からよろしくお願い致します。

あたまから布團かぶれば海鼠哉 蕪村

ほのぼのと虱布團の夜明かな 碩布

狸寝の布團はがれてしまひけり 竹子

まくられて布團又着る怒かな 右衛門

合客の布團引たるそ小賢しき 極堂

立佛木魚の布団を恨むらく 紅線

引つかぶり寝たと答へし布団かな 紅線

- 会長 > 「あたまから布団・・・」、文字通り「なまこ」になった気分なのでしょう。
「ほのぼのと虱・・・」、虱布団とは、壮絶な一夜を過ごしたのでしょうか。しらじら明けになって、漸く虱との戦いも終りを告げて、ほのぼのと、敵を称えています。
「狸寝の布団はがれ・・・」、「狸寝入り」は「寝たふり」のことですね。狸寝入りをしているのが露見して布団を剥がれたと、誰にも経験ありそうな話です。
「まくられて布団・・・」、こちらは『布団』をめくられて怒り心頭ですね。
「合客の布団引たる・・・」、同室となった客の布団を引いて自分を暖かく寝ようとする。これは「ずるい」と言うことですね。
「立佛木魚の布団を・・・」、「木魚」は布団を敷いて、その上に据えられていますね。安定すること。佛具の木魚に敬意を払っているからですね。
「引つかぶり寝たと・・・」、寝たのかと問われて寝たと答える可笑しさですね

- 高橋 > ふふっふ！面白いです。本当に誰にも経験がありそうなことばかりですね。昔も今も人の営みは変わらない。本当に面白いですね。次の季語は「衾」です。長方形だけでなく、綿入りの広袖や襟の付いた着物の様な形の夜具もありますね。所謂、今は搔巻と言われているものですよね。寒い部屋の中で、より暖かく身に添うように作られていて、昔の人の知恵ですね。ご解説よろしくお願い致します。

盗人に咳をしてやる衾かな 桃遠

着て立てうちころげたる衾哉 吟江

ぶくぶくと衾の中の小言かな 一茶

- 会長 > 「盗人に咳をして・・・」、そう、寝る時に掛ける夜具のことで、「衾」はふすまと読みま

すね。盗人が部屋に侵入してきたので、この家の住人の存在を「咳」で知らせたのですね。住居の不法侵入が横行していたということですね。

「着て立てうちころげ・・・」、寝るときに来ていた「衾」を着たまま立ち上がったところ衾の裾を踏んでしまった。だから転倒したのですね。

「ぶくぶくと衾の中・・・」、衾を着て「ぶつくさ」苦言を呈しているのは、おそらく親でしょうね。

高橋 > 親か、親方か、舅か、姑か・・・、十七音字のドラマの世界はいろいろ空想出来て面白いですね。次の季語は「紙衣」。「かみこ」と読み、「紙子」とも書きます。昔、丈夫な和紙に柿渋を塗り、揉みやわらげて着物を作ったそうですね。

ねかへりを聞けば隣も紙衣哉 云暮

干鮭に喰さかれたる紙衣哉 木導

小便に大義がらるる紙衣哉 干皐

めし粒で紙衣の破れふたぎけり 蕪村

紙衣きてふくれありくや後影 召波

紙衣着て枯木の如き翁哉 稻青

我貧は骨に徹して紙衣かな 把栗

ご解説よろしくお願ひ致します。

会長 > 「ねかへりを聞けば・・・」、紙衣は紙で作った服ですから、紙のごわごわした音がして・・・隣の部屋からも同じ音。これは棟割長屋かも知れません。

「干鮭に喰さかれ・・・」、実際に干鮭に食い裂かれたのか、あるいは干鮭の噛みつきそうな歯に、紙衣 は破れてしまったと言い訳していますね。

「小便に大義がらるる・・・」、紙衣を着て用足しをするのは難儀ですね。紙ですから濡らさぬようにせねばなりませんから。

「めし粒で紙衣の破れ・・・」、旅宿の朝の風景でしょう。紙衣を繕う作業です。

「紙衣きてふくれ・・・」、紙衣はどうしても膨らみ気味ですから、後姿は不恰好だったのでしょう。

「紙衣着て枯木の・・・」、翁は芭蕉翁のことを言いますが、稲青は明治時代の俳人ですから、身近な老人で瘠せている方でしょう。

「我貧は骨に徹して・・・」、とりあわせの句です。貧しさが骨まで瘠せてと、いうことですね。

高橋 > 柿渋を塗って丈夫にしてあっても、所詮、紙の衣ですから大変ですね。次の季語は、「綿帽子」「冬帽」「二十廻し」「毛布」で子規の句が、それぞれ一句ずつ掲載されていますよ。

爺と媪と江戸見に行や綿帽子 子規

冬帽の十年にして尚ほ俗吏なり 子規

ふりかへる二十廻しや人違ひ 子規

毛布着て机の下の黦かな 子規

会長 > 「爺と媪と江戸見に・・・」、綿帽子は防寒用の主として女子の使用したのですが、句では江戸見に行くにあります、各地に江戸を一望できる眺望のよい所があり、江戸見坂などという地名として残っています。爺と媪が小洒落て綿帽子を被っているのを見てほほえましく思ったのでしょうか。しかし、若干、田舎者だと蔑んだ雰囲気も感じられますね。

「冬帽の十年にして・・・」、俗吏はつまらない仕事をしている役人のことですが、この場合、能力がありながら、つまらない仕事をさせられている人のことをさしています。十年も同じ冬帽子を被って努力しているのに、低い地位に甘んじている人に同情しています。

「ふりかへる二十廻し…」、「二十廻し」は和服用の防寒コートで男性が着用。「インパネス」とか、「とんび」と呼ばれたもので、お洒落で贅沢な衣服。明治、大正時代に流行したものです。句では「人違い」とありますが、後ろ姿が誰かに似ていたのでしょう。追い越して振り返ったのです。

「毛布着て机の下…」、いわゆる「居所寝」ということですね。躰というからには、よほど疲れていたのでしょう。

高橋 > 面白いご解説有難うございます。昔の人の生活の状況がよくわかります。次の季語は「足袋」です。

花足袋や乳母の背中を馬に擬す 楽之

白足袋の十文といふを女なり 極堂

しばしまて今足袋をはくところなり 寅日子

足袋はきて風呂に入らんとしたりけり 寒樓

足袋はいてきたなき足を隠しけり 露子

合宿や我足袋さがす人の裾 紅縁

会長 > 「花足袋や乳母の…」、花模様の刺繍などを施した足袋ですね。乳母の背中に跨り馬に乗った気分。

「白足袋の十文と…」、十文は二十五センチですから、昔の女性としては、大きめでしょうか。馬鹿の大足という表現があります。あの女は大足だと、蔑んだもの言いですね。

「しばしまて今足袋を…」、寺田寅彦の句ですね。当時としては斬新な口語俳句です。

「足袋はきて風呂に…」、足袋は靴下と異なり、足に馴染むものですから、こういうことになるのでしょう。

「足袋はいてきたなき・・・」、足袋も使いようですね。

「合宿や我足袋・・・」、「がっしゆく」ではありません。「あいやど」ですね。「人の裾」は布団の裾ということです。

高橋 > 次の季語は「大根引」です。一茶が素晴らしい滑稽句を詠んでいるようですよ。

大根引大根で道を教へけり 一茶

会長 > 「大根引大根で道を・・・」、良く知られた一茶の句です。大根引きにとっては、引き抜いた大根を使うことで、言葉をつかわなくても方角を示すことができ、尋ねた者にとっても、わかりやすい。ましてや言葉の違う旅人との会話は、百姓にとっては厄介なものですから、無言で意思の伝達する方法があるなら、便利なものなのです。

高橋 > 本日も面白いご解説をお聞きしている内に、あっという間にお時間に。それでは、最後にご恒例の虎造節で、メて戴きたいと思います。

会長 > それでは、本日の季語で虎造節のひと節を！
♪色褪せしい紙衣や壁にぶらさがるうううう
布団部屋ああああ 狸寝入りがああ
熟睡にいいいい 鞆の手のお女中はああああ♪